

学修成果を地域に貢献する取り組み ～岐阜市本荘地区「雨乞い踊り」衣装製作を通して～

藤木節子，児玉愛子，長浜小春

家政学部生活科学科生活科学専攻

(2021年11月19日受理)

Initiatives to contribute learning results to the local community — Through costume production of “Rain Begging Dance” in Honjo district, Gifu City —

Department of Home and Life Sciences, Faculty of Home Economics,
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501-2592)

Setsuko FUJIKI, Aiko KODAMA, Koharu NAGAHAMA

(Received November 19, 2021)

要 旨

家庭科教員養成において「縫う力を育てる」ために生活科学専攻では1年生，2年生で洋裁の基礎，2年生から3年生で和裁の基礎を学ぶ。2年前期に甚平，2年後期に浴衣，3年前期に一つ身の製作を行っている。3年後期では伝統衣装の製作を行いこれまでに十二単，束帯，采女装束，琉装を製作してきた。本稿では「本荘の歴史を語る会」からの依頼を受け製作した「雨乞い踊り」の衣装完成までのプロセスと，そこから見えた成果と課題について取りまとめたものである。

1. 初めに

本荘地区の雨乞い踊りは400年以上前から行われ，100年前に復活し，明治28年まで実施されてきた。

戦争により中断され今日に至っていたが，6年前に「本荘の歴史を語る会」により着手し，現在5年目である。

これら歴史を紐解く際に本学の丸山幸太郎先生も携わったこともあり，令和2年11月に「本荘の歴史を語る会」浅野 晃一郎会長と和田 浅治氏の2名から，令和4年度ジュニア文化祭が行われるに当たって，踊り子の衣

装製作の依頼があった。

令和2年度後期に雨乞い踊りの資料・データを参考に，デザインの考察を2年「洋服造形実習Ⅳ」の授業内で取り組み，デザイン決定後，令和3年度後期に布地発注，製作を3年「和服造形実習Ⅳ」で行った。

2. デザイン画作成

令和2年度後期の洋服造形実習Ⅳにおいて2年生に衣装デザインを冬休みの課題とし，着装画又は衣装のみのハンガーイラストを描くこととした。

デザイン画を描く際の留意点として、踊りが小学生1～3年生中心で15～20着を製作する予定で、機能的且つ長く着用できる衣装(洗濯できる)をデザインすることを挙げた。

3. デザインの決定

デザイン画は14点集まり、学内で7点に絞った。図1は伝統柄である市松模様、青海波模様をとりいれた衤の付いた着物型、図2にも伝統模様である青海波が用いられている。形は衤のない法被型である。図3も法被型で大きな波があしらわれている。図4は寒色系の色を多用し、雨の冷たさを表現し、水滴が水面に落ちた時の広がり様子を裾の輪の広がりでも表現している。図5は青色と曲線で水の流れや冷たさを表現している。形は衤のある着物型である。図6、図7は法被型で水のしたたり、水紋、流れなどを表現している。これら7点を浅野氏、和田氏に提案したところ、本荘神社・まちづくり協議会のメンバー



図3



図4

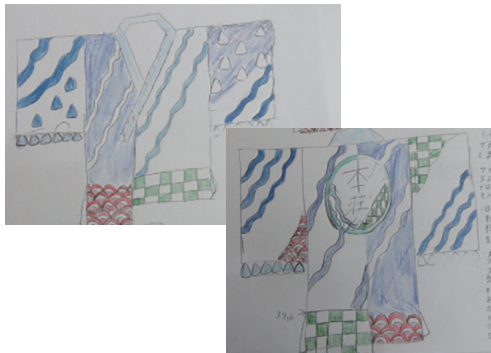


図1



図5

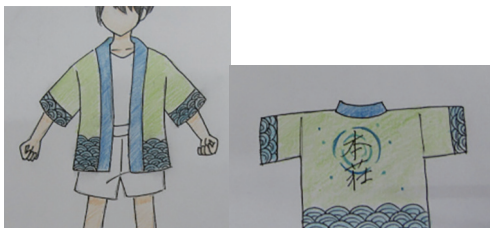


図2



図6

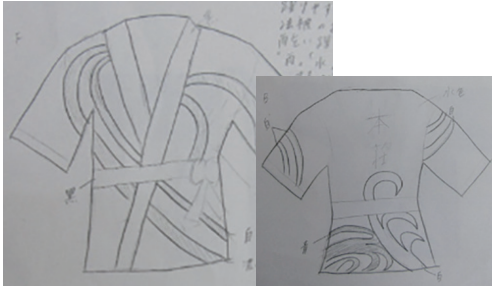


図 7

と相談の結果, 図5の長谷川美佳さんのデザインをベースに再度デザインに手を加えることとなった。

長谷川さんの再デザイン画は図8の通りである。



図 8

このデザインは, 身ごろを流れる線の図柄は龍を表し, 右身ごろに龍の頭, そこから肩へ後ろ身ごろを通して左身ごろから裾にかけては龍の身体を表現した。

龍の身体の鱗を伝統文様の「青海波」で表現している。「青海波」は無限に広がる波の文様に未来永劫へと続く幸せ, 人々の不安な暮らしへの願いがあるとされている為, 「雨乞い」の伝統が地域振興として人々に幸せを届けてほしいという願いを込め, 特別に柄に色も付けて使っている。

また, 源氏物語中に, 光源氏と頭中将が「青海波」を舞う場面があり, そのシーンは息をのむほどに美しいといわれている為, 踊り子の衣装としてふさわしいと考えられる。

全体の色合いは, 雨から水を連想しブルー系でまとめている。帯や袖口のイエローは, 子どもたちの滂沱とした元気さ, フレッシュさを表現し, 全体の中で印象付けるためにあえて反対色を使用している。

法被と同じようにチームを分かりやすくする為に, 背中に「本荘」, 左袖には「❀」マークをデザインしている。

4. 配色打ち合わせ・使用布・染色方法の決定

完成したデザイン画を基に, 染色してもらうため, 相撲旗で知名度の高い吉田旗店を訪れ使用布と色の打ち合わせを行った。

布は洗濯強度や扱いやすさを考慮し, やや厚めの本綿生地で, 表に斜めに細かな凹凸があり, 染色の発色がよく, 独特の風合いのあるシャークスキンを使用することとなった。

当初染色においては型染を検討していたが, コストの関係でプリント印刷に変更した。



図 9 打ち合わせの様子

配色は色見本を参考に濃い青から順に v19, v18, v17, b18, lt18⁺, 黄色 b8, とデザイン画では予想していたが, 染める布によって色相, 明度, 彩度の変化があることを

考慮していなかった為、使用布と近い布を実際に染色した見本布を見せていただき配色変更を行った。

5. 見本作成・試着

デザイン段階では浴衣地での製作を予定していたため、シャークスキンの厚手生地への変更は、ミシンで失敗すると穴が開くリスク、衿付けのカーブ縫い等を考慮し一度デザインを法被のような形に変更し見本の製作を行った。



図10 デザイン変更後法被型

変更後のデザインは袖付け寸法、袖口寸法をそろえ袖づくり、袖付けを簡略化、衿も裾までの直線とし、なるべくカーブを少なくした。

見本製作後、「本庄の歴史を語る会」和田浅治氏に小学生への試着をお願いし、着装時の写真と意見をいただいた。

要望としては法被型ではなく、衿の付いた浴衣や甚平の形にすること、後ろ身頃と、前身頃に5cm程度の差をつけ脇スリットを長めにつけることがあげられた。

要望を基に、寸法を下記のように定め、吉田旗店にプリントを依頼した。

| | S | M | L |
|--------------|-----|-----|-----|
| 出来上がり寸法 (cm) | | | |
| 前幅 | 54 | 58 | 58 |
| 後ろ幅 | 54 | 58 | 58 |
| 前丈 | 70 | 75 | 80 |
| 後ろ丈 | 75 | 80 | 85 |
| 衿肩空き | 6.5 | 6.5 | 6.5 |
| 衿下がり | 20 | 20 | 20 |
| 袖丈 | 20 | 21 | 22 |
| 袖付け | 40 | 42 | 44 |
| 袖口 | 50 | 52 | 54 |
| 衿つけ | 50 | 55 | 60 |
| 衿幅 | 15 | 15 | 15 |
| 衿下 | 25 | 30 | 35 |
| 衿幅 | 5 | 5 | 5 |

また、寸法を記入した仕様書を作成し学生へ配布した。



図11 浴衣型デザインのプリント見本

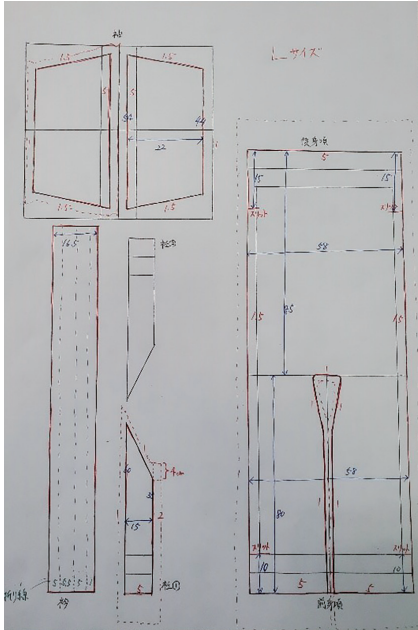


図12 仕様書

6. 衣装製作

衣装製作は和服造形実習Ⅳの授業で行った。サイズはLサイズ4枚, Mサイズ11枚, Sサイズ8枚の計23枚を製作した。

12名を6グループに分け1班がLサイズ, 2～4班がMサイズ, 5, 6班がSサイズを担当した。

製作手順は以下の通りである。

- ①布の裏側に出来上がり寸法を引く。
- ②縫い代を描く。
- ③裁断
- ④袖下, 衤下がりの下, 脇をロックミシンで布端を処理する。
- ⑤袖下をミシンで縫い, 縫い代はアイロンで割る。
- ⑥袖口を2cm, 3cmの三つ折り縫いをする。
- ⑦前身頃に衤をつける。
- ⑧裾を2cm, 3cmの三つ折り縫いをする。
- ⑨衤作り
- ⑩身頃に衤をつける。

- ⑪脇を縫い, 袖をつける。
- ⑫スリットを始末する。
- ⑬サイズタグをつける。
- ⑭紐作り



図13 完成品

7. 製作を終えて見えた課題

これまで生活科学専攻では自分のサイズに合わせた自分の為の衣服作りを主として行ってきた。今回は外部からの依頼を受け、着ていただく人を想い描き、喜んで着ていただける被服製作が求められているが、その気持ちで、学生に芽生えているか疑問に感じられた。

また、コロナウイルス感染症の影響や学生の授業とのバッティングもあり、依頼側とのイメージ共有の不足や、着てもらう小学生への寸法確認等ができなかった。その為本来であればデザイン、型紙製作、仮縫製、試着、型紙変更、染色依頼の順で行うべき部分で十分な情報がないままに進めることとなった。

今後同様の機会があれば相互のやりとりを充実させ、心が通じ合えると更に効果的に取

り組めるのではないかと予想される。

8. おわりに

依頼された23着は12月14日に製作が完了した。令和4年2月2日に贈呈式を行い本荘小学生の踊り子に3年生と共に着装指導を行う予定である。3月19日には本荘小学校成果発表会にて衣装を着装し踊りが披露されることとなっている。

学生には完成の喜びだけでなく、伝統文化の継承の一役を担っている自覚を持たせたいと考える。

この機会を頂いたことに感謝するとともに、今後も地域と連携し、地域貢献のできる人材育成に取り組んでいきたい。